

午前四時半の三ノ宮駅のホームは閑散としていた。大阪方面にしろ、姫路方面にしろ、一つのドアに人が一人いるかという具合で、まるで墨汁で塗り潰されたかのような夜明け前の空が、これに拍車をかけていた。

私は一人で暇だったので、輪行袋を内から張り裂かっぱかりの自転車のタイヤを掴み、指に力を入れたり抜いたりして遊んでいた。常ならばスマートフォンを電源を入れて、SNSで退屈を紛らわしているところだが、これからのことを考えるとそうはいかなかった。

その日は少なくとも、三条大橋から三重県の四日市宿まで自転車と、スマートフォンの地図アプリと、この身を頼りに走らねばならなかったからだ。もしうまくいけば愛知県宮宿まで行こうと思っていた。よって、三ノ宮駅のホームでムダに消費できる電池は一パーセントもなかった。

ところで、この旅の目的は、東海道五十三次をロードバイクで走りきることである。

なぜ東海道を自転車で走るのかと、ある種の根源的な問いをする人は多い。この質問のニュアンスには、危険な、奇妙な、何の得もなさそうな、がおおむね含まれているが、そう聞かれると私は非常に困る。なにしろ根源的な動機の記憶は全くないからだ。

この旅の四年前に母と叔母に話したことが最古の記憶であり、これ以前にあれこれ考えた記憶はないが、このときに思い付いたことではない、と特に根拠はないけれども私は思っている。

だから、先の問いに対する答えは次のようになる。「過

去の自分の発言をウソにしないために」走る、と。

また、テントで野宿をするんだろうとか、多くの備えをすべきたと助言をくださる人も多い。しかし、この旅の荷物は自転車と、リュックサック一つ分で済む。

リュックサックの中身は、ヘルメット、六角レンチ、チェーンロック、チェーン用の潤滑油、行動食、水、お金、スマートフォン、健康保険証、五日分の下着、ジャマ、歯ブラシ、ひげ剃りだけだ。

意外に多いことに書き出してみると気付いたが、海外への旅に必要なものと比べれば遥かに少ない。替えの服に困ったら旅先で買えばいいし、空気入れも、替えのタイヤチューブも、パンク修理キットも必要ない。テントを始めとするキャンプグッズも不要だ。

もちろん、これらはあるに越したことはないが、なくても問題ないし実際に何とかなった。私の持論でしかないが、これらはただ荷物を重くしてペースを遅くするだけだ、ただし東海道に限るけれど。

そしてこれは、あくまで男の体と心を持っている私の場合で、どちらも女となると勝手が違ってくるのかもしれないし、どちらにも当てはまらない場合も違うのかもしれない、と注釈を付けておく。

ところで勘の良い読者様がお察しの通り、私は三ノ宮駅から京都駅は電車で、そこからは日本橋まで数日間かけて自転車で行くことにしたわけであるが、実は私の出身地は兵庫県ではなく東京都であったりする。

京都駅からの旅の前日に、私は東京都から自転車を伴って兵庫県へと行った。その日には父の実家の家族と会う約束があり、これを確実に守るためだった。

ここで余談だが、旅行の前日について振り返る。

まずは三ノ宮駅近くのカプセル・ホテルに行って、輪行袋に包まれた自転車と預けると（新神戸駅から徒歩で運んだが、持ちづらいうし重いしで肩が痛んだ）夕方になるまで観光をした。

その際に『三宮一貫楼』で豚まん、又焼まん、ピリパオを一個ずつ食したが、生地はモチモチと弾力があり、なかの具はぎっしりと詰まっついて素晴らしかった。特に又焼まんは私好みで、これだけのために毎月行ってもよいと思えるくらいだった。

祖父母家族とは夜に対面し、それからは酔っぱらった父に連れ添って（連れ回されて）街を歩いた。

そしてホテルに着いてからはシャワーに入ったが、酔った父がサウナの中で意識朦朧としていたことには焦って、慌てて着替え室へと連れ出した。あの死にかけのカエルのような、とろんとした眼は忘れられない。

父を父のカプセルまで送った後は、私は私のカプセルに入って横になった。そして、明日の時刻表と、三ノ宮駅から京都駅の通常の混雑状況を調べた。

結論としては、午前五時までに起きたときは、すぐにチェックアウトして駅に向かい、それ以降に起きてしまつたら、通勤ラッシュが終わる午前一〇時頃まではホテル周辺にいる、というものだった。混雑時に自転車の容積は邪魔でしかないだろう。

更に余談だが、人生初のカプセル・ホテルは人のいびきが凄まじく、容易に眠りにつくことができなかった。カプセルに入ったのは午後二〇時前だったが、寝るこ

とができたのは午前二時前である。五時間は寝られるだろうという目算は見事に狂わされた。

スマートフォンで調べものを終えてから三〇分は頑張つて寝ようと試みていたが、しばらくすると諦めてイヤホンでドイツ語の『魔笛』を延々と聞いていた。モノスタトスがザラストロクに七七回の鞭打ちの刑を受けたところで意識が遠のいた気がする。

案の定、始発の乗客数は少なかった。電車の連結部に一番近いところに陣取ると、京都駅に着くまでは外の景色をぼんやりと眺めていた。

そのときのことを私はほとんど覚えていない。一段と夜の闇が深くなったかと思えば東の空から幾層もの幻想的な色のヴェールが朝を取り戻してきたことと、ありふれた住宅街がどこまでも続いていたことしか覚えていない。あとはそう、大阪駅近辺で乗客数が一番多くなつたけれど、一五〇センチメートルほどの輪行袋はそれでも乗客の迷惑にならなかつたことくらいだ。私はほつと胸を撫で下ろしていた。

京都駅では、改札前の売店で飲食物とティッシュペーパーを買った。花粉が飛び始める季節だったからだ。

空は既に薄い青に染め上げられていたが、多くの人々が働き始める時刻には早かつたらしく、売店が開くまで改札前で五分ほど待った。右肩に背負つた輪行袋のせいで支払いには手間がかかった。

私は買い物を買ませると、八条口のタクシー乗り場の一角へと歩いた。そして、輪行袋からは自転車本体と前

輪のタイヤを、リュックサックからは六角レンチと、自転車本体と前輪のタイヤの接合部の部品と、チェーン用の潤滑油を取り出し、自転車の組み立て作業を始めた。東京のサイクリング・ショップと家で、これを練習していた頃は四苦八苦していたが、もうすっかりと慣れたもので作業はスムーズに進んだ。

二〇分ほど経つと、自転車は、十全に自転車の役割を果たせる形に整えられていた。輪行袋は煎餅ほどの大きさになって、六角レンチや潤滑油と一緒にリュックサックの中に入れられていた。

ここからが旅の本番だ、と私は意気込んだ。

東海道五十三次の始まりは三条大橋（本来の始まりは日本橋で本来の終わりは三条大橋かもしれないが、ここは便宜的に始まりと終わりを逆にする）なので、正確には京都駅から三条大橋までの区間はウォーミング・アップのようなものだが、それは違う、と私はなんとなく何かを感じ取っていた。

自転車を、あるべき形に戻した時点でスタートなのだと思っていたのだろう、おそらく。

小休止に、私の文章中の文末に付く、おそらく、について弁明のような注釈を付けておく。とどのつまり、これは私が、過去の私の心情についての確信を持っていないことに起因している。

おおよその人間は彼自身や他者についての記憶を、誰かに（ほとんどは自分自身に）都合が良いように改竄していると私は考えているし、それは私自身も例外ではな

いと思つている。

だから私は、とりわけ過去の心情の文については、おそらく、という事象を曖昧化させる言の葉によつて、読み手に、ひいては私自身の認識に、万が一にも誤りを与えないようにする。

おそらくについては、そんなふうには、母国語映画の母国語字幕を見るようにしてほしいのです。あるいは、それは要らないのかもしれないけれども、それを入れることによつて、より誤りは少なくなる、と私は思うのです。映画は聞き間違え、文章は読み間違え。

京の都も閑散としていた。午前七時前とはいへ、ここまで人が少ないのは不自然なように思われた。

スマートフォン地図アプリを用いながら三条大橋に向かつていたが、どこもシャッターが閉まつていたし、道すがら見かけた人は百人となかった。

なぜ、と考へてみたところ、すぐに原因に思い当たつた。新型コロナウイルスのせいだろう、と思つた。中国人観光客が街からいなくなり、SNSでは、特に京都から人が消えている、との情報が流れていた。

だから、これほどまでに人の心配が薄い、と私は納得した。そして、東海道五十三次のスタート・ラインに着いた。

三条大橋の写真を記念に何枚か撮ると、私は四条通を一気に抜けた。

旅の序盤も序盤で体力が有り余つていたし、朝だからか人も車も少ないうゑに道は整備されていて走りやすか

つたし、さらに京都府三条大橋から滋賀県大津宿までは良い景色がいくつもあつたからだ。平安神宮を横目に見ることができ、淡い靄がかかった色彩豊かな緑の深山も趣が深かった。そして、良い景色を眺めると、どういふ仕組みかわからないけれど、体の内から活力が湧いてくるものなのだ。

次の草津宿付近も良かった。雄大な琵琶湖を間近に見ることができたし、草津名物うばもちを売つていいるお店にも会えたからだ。走行ペースを優先して寄らなかつたけれど。

ただ、次の石部宿からは、ほとんど旅先特有の高揚感が萎えた。退屈であつた。ここからは行けども行けども大型のショッピング・センターが並んでいた。そのうえ道路の舗装状況が悪く、一〇秒に一回はある地面の凹凸のたびに手が痛んだ。この先の旅で何度も思うことだが、もし車で来ていれば、どれだけ精神面への負担が少なかつたろうと初めて思う、土山宿までの二五キロメートルであつた。

そして、鈴鹿峠を越えることになつた。土山宿の次の坂下宿は鈴鹿峠の途中にあるし、その次の関宿は峠の和歌山県側の麓にあるからだ。

緩やかな上り坂と代わり映えない景色がずっと続いてきたことに、心は砂漠と化しつつあつたので、どちらでもない鈴鹿峠を私は歓迎した。

峠を越えるとマシな気分になつていた。下り坂の途中で国道から坂下宿に寄り道し、また国道に戻ると関宿まで一漕ぎで下つた。ずっと下り坂なのは最高だったが、急な傾斜で、ブレーキをかける両手を酷使した。自転車が私の制御から外れて車に当たる恐れが

あつた。後日、左手に血豆ができた。

関宿は、人通りの多い観光地だつた。

亀山宿では、亀山城を直に眺めることができた。

石薬師宿までの道は普通の住宅街だつた。

四日市宿に辿り着くと、夕暮れらしい、明るくも暗い橙が空に染み込んできて、とても物悲しかった。人通りが少なく殆どのお店がシャッターを閉めていいるというのは京都と同じであるのに、どこか違う気がした。時刻が異なるせいかもしれない。しかし本質的には同じことのように思えた、おそらく。

その日は、四日市宿の次の桑名宿周辺に泊まることにした。少なくとも、あわよくばの真ん中であつた。

自転車置き場に自転車を置き、チキン・カレーと蜂蜜ナンをインド・ネパール料理屋で食べ、カプセルではないホテルにチェック・インした。そしてホテルの自室で寝支度を済ませると、布団をかぶつて寝た。

二日目から四日目の夕方にかけては、三条大橋以降の旅路と大差がないため割愛する。城などの観光地を横目に見て、峠を越え、夕暮れに寂しさと焦りを感じ、身体に喝を入れ、できるだけ先へ先へと走り続け、着いた先のホテルに泊まつて寝る。

この繰り返しだ。違いと言へば、関東圏に近づくほど道路の舗装状況が良くなつていいたことと、三日目以降はタイムを計測してしたことくらいか。

あとは、そう食事だ。

食べ物自体は異なつても本質は同じであつたが。

私は過去の教訓から、長居しないなら旅先の食べ物は食べないようにしている。

もつとも、全く何も食べないと逆に体を壊すため、コンビニ食品など日常そのもの、あるいは日常の延長線上にあるような食べ物は体に入れる。

人は日常から離れるほど、その心と体に異常が出る。これは私が何の科学的根拠もなく信じていることで、もしかしたら私以外の人には当てはまらないかもしれないが、私の中では少なくとも、そういった法則が働いている。たとえば私は日常の大部分を椅子の上か徒歩で過ごしているけれど、旅行は新幹線や飛行機など、日常のものよりも遙かに速い乗り物で目的地へ移動することがある。日常にないスピードで、日常にない場所へと私の体は着地する。

日常とは、体と心が馴染んでいるルーティンだ。平日は学校で学び、休日は友達と遊びに行くルーティン。平日は国内外、場合によっては国外と国外を行き来して働き、休日は家で羽を伸ばすルーティン。彼女自身がスケジュールを決めて、好きなように働き、好きなように休むルーティン。

どれも彼らにとつての日常であるが、どれも彼ら以外にとつての日常であるとはかぎらない。もし彼らがお互いの日常を交換したならば、多かれ少なかれ混乱することとは想像に難くない。学生には学生の軸があり、商社マンには商社マンの軸があり、フリーランスにはフリーランスの軸があるのだ。それぞれの軸を引っこ抜いて、新たな軸を自分の中に入れるのは、それ相応の時間に時間を要する（個人差はあるはずだけれど）。

それは、日常が旅行という人を除けば、旅行も同じことだ。旅行という行為には、日常とは異なるところへ連れていく作用がある。つまり非日常なので、やはり多かれ少なかれ混乱を来す。混乱は思考に現れるかもしれないし、感情に現れるかもしれないし、肉体に現れるかもしれない。そして、**混乱をなくす(薄める)**には、旅行という行為そのものか旅行先の日々が、新たな軸として体に馴染むのを待つか、**できるだけ旅行先の日々を旅行以前の日常に合わせるしかないのだ。**

まだるっこしい蛇行をしたが、つまりはそういうことだ。私は混乱を抑えるために、そこで長居しないなら旅先の食べ物を食べないようにしている。できるだけ旅行先の特産品は食わず、コンビニエンス・ストアやファミリー・レストランで食事を済ませます。今回の自転車旅は夜を除けば、殆ど常に移動しているため、特に非日常に注意しなければならなかった。過去の傾向として、私は熱が出やすい。たまったものではない。

四日目が夕方に差し掛かる少し前、私は静岡県三島宿付近で大判焼きを食べていた。あずき餡一つと白餡一つ、これからの難所を遠目に眺めながらだった。雲行きが怪しかったため、スマートフォンで箱根のこれからの天気調べた。午後四時までは雪だが、以降は曇りに変わるこのことだった。

私は大判焼きを食べ終わると、暗雲が立ち込める箱根峠へ。ペダルを漕ぎだした。

鈴鹿峠、小夜の中山、薩た峠、と峠を越えてきたが、

箱根峠は噂の通り、特段に厳しかった。

傾斜は厳しく長い。三島宿から箱根宿の、およそ一七キロメートルの間、峠に近づくほど肺活量も脈拍も上がり、足の筋肉は軋み、ペダルの重みは増していった。住宅街でさえも、自転車から降り、押して歩くことは珍しくなくなっていた。徒歩は、石畳が続く旧街道のような道か、小夜の中山の峠付近か、コンビニエンス・ストアで補給をしたときくらいだったのだけれども。

天候も酷さを増す一方であった。当初は青空に雲が点々としていたが、箱根峠に近づくにつれて逆転していき、周囲の景色が森と国道を走る車くらいになったときには、とうとう湿ったコンクリートのような色に空は満遍なく覆われていた。晴れは曇りになり、小雨になり、大雨になった。雨が降り出すと、スマートフォンは短いトンネル内ではしか使えなくなり、箱根町までの方角も距離も国道の看板のみを頼りにすることとなった。

自転車も狂った。凍った路面の上を、うっかり走って転ばせたためであった。その際にチェーン自体は守ったけれど、変速機能周辺部の部品は守れなかったために、ペダルを漕ぐとランダムでギアが変わる自転車が出来てしまった。これは後日、小田原の自転車屋で修理してもらったときに知ったことだが、ギアを変えるたびに部品が食い込んで自転車を壊していくという仕様になっていたらしい。

こうした中で私は箱根峠越えを目指していたが、あと三分の一というところで、天は更なる試練を私に授けなされた。大雨が雪に変化したのだ。雪はハンドルを握る指の体温も、眠気を堪える意識も、自転車の耐久も少しずつ奪っていった。

これはいけない、と私は口の肉を噛んで叱咤し、ペダ

ルを踏む足により一層の力を込めつつも、ひとりでギアが変わる現象を不気味に思っていた。

箱根峠、と記された木製の標が眼に入ったのは、それから曲がり角を数十回ほど通った後であった。このときは前に進むことに全てを注ぎ込んでいたのでほぼ記憶はなく、気の利いた感想は言えない。

峠に着いた途端に雪が止んだのは、まるで映画の中にいるようだった、とだけ。

それからはスマートフォンを使ったので、ほとんど危うげなく箱根町に着くことができた。色々と消耗していたので、箱根湯本へは行かずに近場の宿に泊まった。

その近場の宿は二人一組で最大八人まで泊められるのだが、幸運なことに、その日は老夫婦一組しか泊まっていなかったため、私は無事に泊まることができた。

幸運は続いた。宿のご主人は、私が自転車で来たことを知ると、「こんな日に自転車だなんて無茶なことをするね。すごい大雪が降ってたでしょ。みんな上ってきてないよ」とおっしゃりつつも、宿の前にある電柱（ほど近くに屋根がある）に自転車を停めていいと勧めてくださいましたし、実際にチェーンロックをかけて停めさせてもらった。さらには、私一人で二人分の料金は取れないと宿代を安くしてくださいました。とてもありがたかった。

スリッパに履き替え、急な傾斜の階段を上ると、ご主人と私は目の前にある部屋に入った。私が今晚泊まる部屋らしかった。ご主人はエアール・コンディショナーを起動させ、その部屋について一通りの説明を終えると、一階へ戻っていった。私は、いまだにカチコチに冷えていた両手をエアール・コンディショナーと私自身の吐息で暖

めていた。

手の具合が良くなると、部屋に備え付けのお風呂に湯を溜めて、全身を浸らせた。体の冷えが完全に解かされていくのを感じた。お風呂から出ると体をタオルで拭き、リュックサックの中の固形食品をペットボトルのお茶と一緒に流し込んだ。室温はエアール・コンディショナーの恩恵で、雪が降るくらい（私が部屋に入るまでは換気されていた）から、ダウン・ジャケットがいらなくなるくらいに上がっていた。私は布団を敷き、その上でSNSを眺め、常のように日付けが変わる時刻よりも後に寝た。

五日目の朝、私は宿の朝食を食べた。宿の食事を頂くのは、この日が初であった。難所を越え、心に余裕が生まれていたのだろう、おそらく。この日までは、朝は貴重だからと、体に必要なエネルギーを流し込み、早々にチェックアウトするのが常であった。

食卓には、トースト、ハムエッグ、シーザーサラダなどが並んでいた。セルフ・サービスで紅茶やコーヒー、オレンジ・ジュースなどの飲み物を注ぐこともできた。私はオレンジ・ジュースをコップに注いだ。

老夫婦も上の階から降りてきた。私は会釈し、朝食を始めた。それから程なくすると、どうやらご主人と老夫婦の会話の中で私のことが話に上がったらしく、私も会話に加わることになった。昨晚のご主人との会話を除けば、コンビニエンス・ストアやファミリー・レストランで「これ一つ、お願いします」や「レシートは大丈夫です」としか、この旅で話したことがなかった私にとって、それは新鮮だった。話の流れで老夫婦と同じ区に住んでいることが判明し、これには驚かされた。

朝食と支度を済ませ、ご主人にチェックアウトする意を伝えると、その際に行動食のチョコレート菓子をいただいた。本当にありがたいことである。

宿を出ると昨日の雲がウソのように澄んだ青空だったけれど、それでも寒いことには変わりがなかった。チェーンロックを電柱から取り外し、リュックサックにしまつて、できるだけギアを変えないように自転車を漕ぎ始めた。

ギアを変えないコツは、なんとなく掴んでいた。

箱根の下り坂は鈴鹿峠以上の急勾配で、できるだけスピードを落とそうとしてもブレーキは全然かかってくれなかった。さらには鈴鹿峠と違って、神奈川県側の箱根峠は歩道がないに等しかったため、いつ車が後ろから迫ってくるか戦々恐々としていた。特に箱根の七曲りというところでは、もし後ろから車が来たら五分五分以上の割合で接触事故を起こし、もしかしたら死ぬ確信があった。幸運なことに、現実ではブレーキがかからないときに車が来ることはなかったけれど。

そして無事に小田原宿に着いて、自転車のギア周りを直してもらった後は、順調に日本橋まで辿り着いた。特に神奈川宿（現在の横浜駅付近）からは土地勘が働いたため、もう迷うことはなかった。